

II 次の文章を読んで空欄に最も適切な語句を記入し、下線部についてあとの問いに答えよ。

14世紀後半の中央アジアを舞台に活躍した **A** は、やがて西アジアから北インドにまたがる大帝国を築き上げたが、その原型となったのは、13世紀前半に誕生したチャガタイ=ハン国であった。以下、チャガタイ=ハン国が、中央アジア情勢の中でいかなる変転を経て大帝国へと発展していったのか、その過程を概観する。

大モンゴル国を建国した **B** =ハンには嫡出の男子が4人おり、次男のチャガタイは、オビ河の支流であるイルティシュ河上流のアルタイ地方と4つの千戸を与えられた。これがチャガタイ=ハン国の起源である。**B** =ハンは、1218年にシル河中流域のオアシス都市オトラルで起こったモンゴル使節団殺害事件を口実として、**C** =シャー朝への遠征を開始し、これに従軍したチャガタイは西方に所領を拡大した。やがてチャガタイは、現在の中国・カザフ国境付近に位置するアルマリクに本営（オールド）を置くと、春と夏には天山山脈の広大な草原地帯に、秋と冬にはそこからバルハシ湖に向かって西流するイリ河流域に移動して滞在した。

1229年、**B** =ハンの三男の **D** は、兄チャガタイの協力のもと第2代皇帝（大ハーン）に即位すると、オルホン河上流に首都の **E** を建設し、ここから各地へ向けて駅伝を整備した。⁽¹⁾ とりわけ、**E** とアルマリクの間には最も早く駅伝が置かれ、チャガタイはこのルートを使ってしばしば両地を往来し、皇帝の後ろ盾たる自らの権勢を誇示したのである。

1260年代に入ると、**D** の孫である **F** が反乱を起こし、第5代皇帝フビライに不満を持つ勢力を糾合して中央アジアに独立王国を打ち立てた。1301年に **F** が没すると、当主のドゥアを中心とするチャガタイ家が勢力を拡大し、1306年にアルマリクでクリルタイを主催した。こうしてドゥアは名実ともに中央アジアの支配者となり、ここにいわゆるチャガタイ=ハン国が成立したのである。

14世紀の前半、チャガタイ家の当主たちは、イリ河流域からさらに西方のマー=ワラー=アンナフルへ本拠を移したため、チャガタイ=ハン国西部に住むモンゴル人たちの都市化とイスラーム化が進んだ。これに対し、バルハシ湖南方のセミレチエ地方に住むチャガタイ=ハン国東部のモンゴル人たちは、あくまで伝統的な遊

牧生活を固守した。そのため両者は反目し合い、14世紀半ばにチャガタイ=ハン国は東西に分裂し、群雄割拠の時代に突入した。その後、東チャガタイ=ハン国では、ドゥアの孫のトウグルク=テムルが台頭し、1360年ころには一時的に東西統一に成功した。彼らの本拠地である天山山脈からセミレチエにかけての地域は、ペルシア語で「モンゴル人が住む土地」を意味するモグーリスタンと呼ばれた。

このころ、モンゴル貴族出身の軍人であった [A] はトウグルク=テムルに帰順していたが、混乱に乗じて勢力を拡大すると、1370年にマー=ワラー=アンナフル全域の支配に成功した。次いで、モグーリスタンとアム河下流の [C] 地方に絶え間なく遠征をくりかえして中央アジア統一を実現すると、1380年代以降は、隣接する西アジア、ロシア南部、北インドへと侵攻し、勢力を拡大しつづけた。こうして [A] は、一代にして巨大な世界帝国を築き上げた。

対外遠征に明け暮れた [A] の生涯最後にして最大の戦いは、オスマン帝国とのそれであった。マムルーク朝とオスマン帝国との連絡を絶つため、彼は1399年から1401年にかけてシリアに遠征し、中心都市のダマスカスを陥落させた。翌年にはアナトリアに進軍し、ビザンツ帝国の首都コンスタンティノーブルの包囲を解いて引き返してきたオスマン帝国軍を、その年の7月にアナトリア中部の [G] で迎撃し、バヤジット1世を捕虜にした。1404年には、みずから20万の兵を率いて中国に向かったが、翌年2月、滞在中のオトラルで病に倒れ、そこで波乱の人生を終えたのである。

[1] 大モンゴル国によって整備されたこの駅伝制度のことを、モンゴル語の通称で何というか。

[2] 自らもムスリムであったトウグルク=テムルは、モグーリスタンの住民を改宗させるため、イスラーム神秘主義教団の布教活動に協力した。このような教団に所属し、イスラームの唯一神との合一経験を目指して禁欲的な修行生活を送る人々のことを、一般に何というか。カタカナで答えよ。

[3] このとき、ダマスカス側の代表として和平交渉を担当したのは、『世界史序説』などの著述で有名な歴史家であった。この人物は誰か。